

# テツカとD×Dの魔法法律 相談事務所

カツマ・タカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

霊を裁く魔法師家執行人、薪菱鉄火。

彼はとある依頼のため、悪魔の住む町『駒王町』へと向かう。

そこで彼はそこに住む人たちを巻き込みながら霊犯罪を解決していくのである。

ハイスクールD×Dとムヒョとロージの魔法師相談事務所のクロスオーバーにチャレンジしてみました。

ものすごい駄文になるかもしれませんが、あたたかい目で見守ってください。

また、オリ主、独自設定、独自解釈、設定改変などがありますので、不満を感じた人はすぐに戻ってください。

注) 更新再開しました。

# 目次

プロローグ&設定関係

注意事項及び独自設定 | 1

第0条 依頼受けました | 4

旧校舎のディアボロス

第1条 悪魔再会しました | 10

第2条 もう一度助けました | 18

第3条 悪魔の説明します | 26

第4条 魔法師、説明します

36

第5条 イッサー、シスターを助けま

す | 44

第6条 魔法師、執行します | 52

# プロローグ&設定関係 注意事項及び独自設定

## 独自設定

登場人物設定変更について

この作品では、一部の登場人物の設定を変更しています。

タグでは主人公であるイツセーのみとなっておりますが、他の登場人物の設定も変更する場合がございます。

また、他作品の登場人物も登場する場合がございます。無論、ムヒヨロジの登場人物も登場します

年代について

年代については、ムヒヨロジ原作終了後から数年後となっております。よって一部のムヒヨロジ登場人物たちの容姿や状況など変化しております。

地獄の六王

地獄の六王は『魔王』『冥王』『破王』『魔導府王』だけでなく新たに『龍王』と『獸王』の2王を追加した。

また、機賊王に返り討ちにあつた2、3王はこの『龍王』、『獸王』、『魔導府王』という設定。

地獄の十本刀・地獄の四賢者

魔元帥、霊撃手、黒鯨、幽李の他にも新たにオリジナルを追加する予定

魔法律

通常の魔法律や毒島の遠隔魔法律やシューターの見えない魔法律の他にも特殊な魔法律を登場させる予定である。

執行について

魔法律の執行は罪状のよって呼べる使者が決まっていますが、今作品ではムヒヨロジ原作で登場した執行以外はどの使者でも呼べるようにしております。

これに関しては、呼ばれた使者の数があまりにも少ないためである。

ただし、例外として同じ使者でも執行ができるようになっていきます。(毒島さんの遠隔魔法律やシューターさんのような見えない魔法律のようなもの)

悪魔・天使・墮天使の存在について

悪魔・天使・墮天使は少なからず霊格が存在しており、煉も少なからず持っています。

悪魔たちは普通に過ごしていれば何の問題もないが、はぐれに落ちたりすると、悪霊になる可能性を持つ設定にしております。

また、霊格を持っていますので、魔法の術系統も通用するようになっております。魔法の教育課程について

ムヒヨロジ原作でも初心者用魔法書ガイドが存在するように、魔法の通信教育を行っているようにしております。実際、エンチューが在学中に通信教育を進められた場面があつたのでそのまま採用しました。

ただし、通信教育で学んだ場合、取得する階級は『第二級書記官』のみで、内容は魔法の基礎、魔法が関わった歴史や事件、魔封じのペンや札の使い方のみである。

なお、この独自設定などは追加したり修正したりすることがあります。

また、皆様の意見なども参考にしていこうと思っておりますので、何かございましたら遠慮なくお申し付けください。

(注) 誹謗中傷や荒らしなどはしないようお願いいたします。

## 第0条 依頼受けました

この世には人の知らない不可解な出来事が数多く存在している。

黒い羽の生えた人間を見た、悪魔との契約、奇跡のような力を持つ者などなど、数えだしたらきりが無い。

しかし、そんな不可解な出来事のうちでもっとも多くの人に知られている存在がある。

その不可解な出来事の名は“幽霊”である。

誰もが知る幽霊の存在。しかしそれは、ほんの一部に過ぎないのはご存じであろうか？

幽霊も人と同様に死した後でも犯罪に手を染め、人間達に危害を加える幽霊達を“悪霊”や“怨霊”などと呼ばれているのである。

だが、そんな悪霊達に裁きを下さす者達がいる。

その者達の名は“魔法法律家”。悪霊達に地獄の裁きを与える幽霊専門の退魔集団である。

これはある1人の魔法法律家の執行人がとある街の悪魔達と共に悪魔や悪霊達と対峙



し、共に成長していく物語である。

某所 とある喫茶店

古き良き木の臭いとコーヒーの香り漂う店内。その店内の一角に二人の男女が向かい合っていた。

女性の方はおかつぱ頭に黒いマントを羽織っており、青年の方は白髪の長髪に赤い眼、服は色んな服の欠片を継ぎ接ぎしたかのような服装をしている。

「んで、俺を呼んだのはどういう用件なんだ、マイさん？」

マイと呼ばれた女性は青年に一通の封筒を手渡した。

「何これ？」

「協会からの指令書だ。詳細は自分で見る。テツカ」

そう言つてテツカと呼ばれた男は封筒を受け取ると、すぐに封を切つて封筒から数枚の書類を取り出す。

其処に記されていたのは……

「何々、『拝啓、まきびしてっか薪菱鉄火殿。この度、魔法律協会本部はあなた様を“駒王町”への異動を決定とする。尚、この異動に従わない場合は魔法律免許剥奪及び魔法律協会永久追放

の処罰を与える』……つてこれ、完璧に脅しじゃねえか!？」

「やはり……そう来たか」

「やはり……知つてたのかよ!? しかもこの異動先は……」

「別名『魔法律家の流刑地・駒王町』。この街は悪魔達の……」

「しかもグレモリーとシトリーが管理している街じゃん。行きたかねえな、おい」

愚痴るテツカはもう一枚の書類に目を向けると、その書類には何も書かれていない白紙の書類であつた。

「白紙? 何故そんな物が?」

「いや、俺の予想が正しければ……」

そう言つてテツカは白紙の上に右手を置いて力を入れると、文字が浮かんできた。

「これは……『煉紙』か!？」

「ああ。しかも、俺にしか使えない物が入つてたつて事はだ」

「ペイジ本部長が何の為に?」

「そいつは最後の書類に書かれているだろうなあ」

そう言つてテツカは最後の書類を手に取り確認すると、其処には。

「二人からの要請つて事か……。面倒だな……」

「面倒? どういう事だ?」

マイがそう聞いてくると、テツカは最後の書類をマイに手渡す。其処にはこうが書かれていたのである。

ここ数年、駒王町内における悪霊・怨霊による霊犯罪が多発、霊の異常発生が起こり、自分達では対処できないと判断し、応援を要請するという内容だ。

「駒王町での霊犯罪多発？ 何故こんな事が？」

「その答えがこの煉紙に書かれている内容だ」

そう言ってテツカは煉紙の書類をマイに手渡す。

「な!? まさか……こんな事が!？」

「こんな事だからこそ、俺に任せられたって訳だ」

そう言ってテツカは注文したコーヒーを飲み干し、席を立った。

「んじゃま、行くとするか」

「本当に受けるのか？」

「あの場所がああなった以上、俺にしかできないよ」

「なら私も……」

マイも同行すると言うが、

「いや、マイさんはペイジの爺さんとエロ裁判官と一緒に行動してくれ。俺と行動していると老害共に何言われるか……」

「では、駒王町まで送ろう。それだけはさせてくれ」

「あれ？ マイさん免許持ってたっけ？」

「つい先日にな。持ってた方が何かと便利だと思ってるな」

何かと不安な予感がしてきているのは気のせいであろうと思うテツカであったが、今の自分に足が無い<sup>ため</sup>無碍に断ることはできないと感じ取った。

「それじゃあ、頼みますよ今井玲子裁判官」

「こんな時に真面目になるな、薪菱鉄火執行人」

こうして、悪魔が住む町に一人の魔法律家が足を運ぶのであった。

おまけ あだ名の由来

「ところで、その『マイ』って何なんだ？」

「ん？ 簡単だよ。『今井』の『マイ』だよ」

今井↓イマイ↓マイ

「なんか微妙だな」

「んな事言ったら、アンタの彼氏のあだ名も変じゃね？ 何だよ『ロージー』って」

「そんなこと聞かれても……って彼氏じゃない!!」

「うわっ!?! 馬鹿!・前、前!!」  
本当に大丈夫であるか不安である。

## 旧校舎のディアボロス

## 第1条 悪魔再会しました

テツカ Side

「イテテツ。手荒い運転しやがって……。ちゃんと前を見て運転しろってんだよ……」

まったく、免許取り立てなんだから慎重に運転……。いや、俺が悪ふざけたのが悪い。アレでもお似合いなんだけどなあ。二人とも……。

しっかし、まあ。

「微かだが、霊燐を感じるなあ。こりやあ何時、悪霊共が出てきても可笑しくないなあ……」

そう、今にでも悪霊達が現れそうな雰囲気であるが、それでも結界の御陰か力の弱い悪霊達も簡単には行動できないようだ。それはそれで有り難い。

「アイツ等に会う前に今日の宿を探さないと……ん？」

何だ？ この鉄臭い匂いは……？

「コイツは……血の臭い!? 何処からだ!？」

「ここにきて早々、厄介事かよ！ しかもこの気配は?！」

「ド畜生！ 悪霊も一緒かよ！ ざけんじゃねえぞ！」

愚痴を言う前に一刻も早く急ごう。間に合えよ！

テツカ Side End

イツセー Side テツカが来る少し前

俺の名前は兵藤一誠<sup>ひょうとういつせい</sup>。私立駒王学園に通う高校生だ。俺は今、人生で最高の瞬間を迎えている。それは、こんなエロくてスケベな俺にも可愛い彼女ができました！

名前が天野夕麻ちゃん。綺麗な黒髪でスレンダーな女の子。天野夕麻ちゃんが俺の前に現れてすぐに「好きです。付き合ってください」って言われたから即OKだしちゃいました。

そんなもって彼女との初めてのデート。もう、めっちゃくちや興奮しツ放しですよ。これで俺も暗い青春からおさらばできる。まさに人生で最大の嬉しい出来事なのだ。

そう、普通は嬉しいことなんだ。

でも、俺は彼女の正体を知っている。彼女は『堕天使』。堕ちた天使の彼女が何のために俺に接触してきたのか？ その理由も分かっている。

それは俺の中に宿っている神セイクリッド・ギア器『赤龍帝の籠手』に間違いのないであろう。『赤龍帝の籠手』は『神滅具』ロンギヌスと呼ばれ、その力は神をも殺す危険な代物である。

こんな神器を持つているから俺は狙われたのだろう。しかし、何だろう？ 彼女の目は明らかに、

（助けを求めている目だ……）

そう、俺はその目を知っている。昔、俺に助けを求めた子と同じ目をしていた。できれば俺も助けたい。だったら、

（俺のできることをすれば良いんだ！）

そう思っていく内に俺と夕麻ちゃんは公園へとたどり着いた。

「今日は楽しかったね、イツセー君」

「ああ、喜んでくれて良かったよ」

今日のデートで夕麻ちゃんは本当に楽しそうだった。俺はそう思えてくる。例えばこれが彼女にとつて遊びだったとしても。

「ねえ、イツセー君。私のお願ひ聞いてくれる？」

「願ひ？ どんな願ひ？」

「分かり切っている。分かり切ってたんだ……」

「あのね、し「死んでくれないか……でしよ？ 夕麻ちゃん」!？」



やっぱりそうだったんだ。案の定夕麻ちゃんも驚いているみたいだ。

『『どうして分かった』でしょ？ 実は告白されたときから知ってたんだ。君の正体が墮天使であること……』

「知ってたんだ……。じゃあ、私の目的も分かるよね？」

「ああ、俺の中に神器があるからだよね」

「そう、あなたは不幸にも神器を持って、その神器が私達にとって危険因子となる。だから……」

「俺を殺す。そこまでは良いんだ。問題なのは……」

俺はもう一度、夕麻ちゃんの顔を見てこう言っただ。

「何で夕麻ちゃんは泣いているんだよ？」

「え？ 私……泣いている？」

夕麻ちゃんがそう呟いて顔に手を当てると、夕麻ちゃんの目からしつかりと涙が流れていた。

「本当はこんな事したくない。もしかしたら、誰かに無理矢理やらされているんじゃないのか？」

「ち、違うわ！ これは私の遺志で……」

「自分の意思なら、助けを求めるような目はできないはずだ！ 夕麻ちゃんだって本当

はそう思つてんでしょ！」

「!!」

俺の言葉に彼女は言葉を失う。それもそうだ。会つて間もない相手に自分の抱いてる思いを見抜かれたんだから。

「もし、夕麻ちゃんが苦しい思いや辛い思いをしてるのなら、俺は君を助けたい！ 力になりたいたいんだ！」

「!! ……イツセー君」

彼女の哀しみの感情が限界だ。そう思つて俺は夕麻ちゃんに手を差し伸べる。

「大丈夫。俺が夕麻ちゃんを助ける。俺を信じて！」

「……イツセー君。わ、私を……」

夕麻ちゃんが助けを求める……その時だった。

「残念だが、大切な手駒を失うわけにはいかないのでな……」

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには、夕麻ちゃんと同じ黒い翼を生やした墮天使の男が飛んでいた。

いや、でもコイツ……、何かがおかしい？

何か違和感を感じた俺は、ベルトに提げている袋からアレを取り出そうとしたその時、

ヒュツ。ドン！

後ろから風きり音と鈍い音がしたが、俺はすぐに理解し、再び後ろを見ると、そこには、目が虚ろで何かを投げたような構えをしている夕麻ちゃんだった。

「ゆ…………ゆ…………ま…………ちゃん…………？」

ま、まさか…………夕麻ちゃん…………『操られて』いるのか…………!?

そう結論づけると同時に足下が崩れて、倒れていた。

「危ない危ない。まさかお前のような下等な人間にレイナーレが懐柔されるとはなあ。

もう少し『糸』を調整しなければなあ。だが、目的は果たした。帰るぞレイナーレ」

「ハイ、ドーナシーク様…………」

夕麻ちゃんとはドーナシークと呼ばれた墮天使と共に姿を消した。あとに残ったのは、腹にポツカリと穴の空いた俺の姿だけだった。

ち…………くしょう…………。こんな所で終わりなのか…………？ 俺は…………まだ…………やり残した…………事が…………有るのに…………

「死に…………た…………く…………」

俺の意識が遠のく、その時だった。

「おい！ 大丈夫か!!? しっかりしろ!!」

その声を最後に俺は意識を失った。

イツセー Side End

テツカ Side

俺が来たときには、既に殺された後だった。確かにこの場所には悪霊の反応も感知されていたが、今は悪霊の前に、

「こんな所で死なせてたまるか!!」

すぐさま治療に取りかかろうとしたが、俺の手は止まってしまった。何故なら、既に死んでいる上に手の施しようがない……」

クソツ!! 俺がもう少し早ければ助けられたのに!

「とにかく今は、警察とご家族に連絡を……」

俺はすぐにケータイを取り出そうとしたが、何かを感じ取った。

(ん? この気配……何処かで……って、まさか!?)

俺の予想が正しく、犠牲者の前に見覚えのある魔法陣が浮かび上がってきた。しかも、その模様は俺のよく知る模様であった。

「あなたね、呼んだのは……って、テツカ!?!」

「やっぱりお前か、リアス」

そう、この駒王町を統治している悪魔の1人で俺の幼馴染みでもあるリアス・グレモリーその人であった。

おまけ 協会に帰還中の今井さん

「まったく！ 何を考えているんだ、テツカは！」

私が草野のか、かかか、彼女など……。今の草野はそんな事をしている場合にはないのに……

「……今度、事務所に行つて草野に魔法律の基礎を教えに……。つて私は何を考えているんだッ!!」

コンコンッ

「ん？ なんだ？」

「あのく、すみません。ここ駐車禁止ですよ」

……やつてしまったなあ……

## 第2条 もう一度助けました

テツカ Side

リアスと再会して次の日。後のことをリアスに任せて俺は宿に泊まることにした。まあ、あのリアスの事だ。今頃、あの犠牲者はリアスの眷属になっているんだし。

今は俺が出来ることをすればいい。それだけだ。んじや、まず……

「事務所になるところ探さねえとなあ。つたく、あの老害共、事務所の紹介すらしねえのかよ。まあ、愚痴つても仕方がないか」

早いところ、事務所探してゆつくりしようか……。いい物件あればいいが……

只今、事務所探し中、暫くお待ちください。

事務所探しをして数時間……日が暮れてきたが、中々いい物件が見当たらない……あっても家賃がけっこう高い。軽く俺の食費の2倍は掛かる。

その上、ホテルに泊まっている料金だって馬鹿にならない。

「やっべく、マジどうすつか。ホテルに泊まってるって金が掛かりすぎるし、かといってホテルを出て公園とかで野宿したら職質かけられるぞ。マジどうしよう……」

こうなったらアレを……いや待って待って、アレは最終手段だ。そう易々と使えないぞ。はあく、困ったぞ、こりや。

「はあく、この街に知り合いがいれば……って、よく考えたら、知り合いなのって、リアスとソーナぐらいだし……。そう、易々と頼るわけには……アレ？ これって詰んだか？」

本当にどうしようかと悩んでいるが、悩んで経つても仕方ないか。

「今日はこのくらいにしてメシでも食いに行くか」

そうして、俺は事務所探しを止め、メシを食いに行くことにした。

テツカ Side End

イツセー Side

「クキヤキヤキヤキヤキヤ！ どうしたどうした！ 反撃してこいよ、はぐれ悪魔くうくん！」

松田の家から帰る途中にまた墮天使が襲ってきた。しかも、はぐれ悪魔扱いで……。「反撃しないと殺しちゃうよ。ホーラホーラ反撃してこいよ、クキヤキヤキヤキヤキヤ！」

馬鹿にしながら光の槍を投げ続ける墮天使。その光の槍をかわしながら絶賛逃亡中の俺。ここ最近、俺の運勢って最悪だよなあ。今度被って……いや、無理か。悪魔になっちゃったし……。しかし今は……

「取り敢えず、広い場所に出ないと反撃できな……って、危ねえ!」

「あー、惜しい! 頭狙ったのにかわしやがって! 心眼!? 第六感!? 悪魔のくせに変なモン持ってんじゃねえぞ!!」

ちくしよう、訳分かんない上に、お構いなしに光の槍を投げてくるし、悪魔になってもドライグは目を醒まさないし……取り敢えずは広いところに出ないと……

そう思っていくうちに、ある場所に到着した。其処は俺と夕麻ちゃんが初めてのデートで訪れた場所。そして……

『操られた』夕麻ちゃんに殺された場所……

正直、此処には来たくなかったけど、こうなったら仕方がない!

俺は墮天使を撃退する為、ベルトに提げている袋から数枚の札と万年筆のようなペンを取り出し、墮天使が来るのを待った。その間にいつでも札に字が書けるように準備す



る。

「おんや〜? 逃げるの止めたんですか? 諦めたんですか? 諦めたんだつたらとつとと死…」

今だ!!

「喰らいやがれ! 『破魔の術』!!」

フウツ……バシユツ!!

「ウギヤアアアアアツ!!」

良し! 『破魔の術』が効いたぞ! 次は……

「チョーシこいてんじやねえええぞ!! この腐れ悪魔小僧オオオオオ!!」

「調子に乗ってんのはオメエだろ! 次は魔縛りでも当て……」

「当たる前に先手必勝! ひっさーつ、光の槍乱れ投げー!!」

俺が魔縛りの術をやる前に墮天使が光の槍を何十本も投げてきやがった。しかも速度も速い。今から防御系の術を使っても間に合わない、その時だった。

「魔法特例法第82項により、『銀の鎧』を発令する」

その言葉と同時に俺の周りに銀色の光が現れると、墮天使の光の槍が弾かれ霧散していった。

「フウ〜、間一髪だったな。あと少し遅かったら、また死んでたぞお前」

其処にいたのは白髪の長髪で継ぎ接ぎの変わった服装をした男だった。しかもその手には魔法律家の執行人しか持つていない『魔法律書』を持つていた。

「あ、あんたは……執行人……なのか？」

「おろ？ 執行人を知ってるってことは……お前さんも魔法律家か？」

「あ、ああ。俺は……」

「俺を無視してんじゃねえええぞ!! 腐れ悪魔共がああああ!!」

あ……すっかり忘れてた。しかもかなりご立腹のようだ。

「いきなり現れて俺の槍を打ち消すなんて何処の魔術師だあ〜？ 舐めてつとぶち殺すぞゴラア!!」

「悪いが、コイツを死なせたらコイツの主様にどやされるの俺だからな。あ、あと、俺は魔術師じゃあねえぞ。俺はこの町に赴任してきた魔法律家の執行人、薪菱鉄火様だ。覚えておきな、カラスもどき」

マキビシ……って、天才魔法律家の!? 俺、とんでもない人と出会ったなあ。

「テメエ、魔法律家か……。厄介な奴が出てきたもんだなあ。」

「厄介なのは、俺だけじゃないぜ？ お前、この町を管理している悪魔を知ってるか？」

……？ どういう事だ？ そう、考えていると……

「その子達に触れないでちょうだい」

その声とともに俺とテツカ……さんの前に、赤い魔方陣が現れ、其処から赤い髪の人  
の人が現れた。

というか、この人……

「グ、グレモリー……先輩」

そう、駒王学園の二大お姉さまの一人、リアス・グレモリー先輩だった。ああ、今日  
も先輩、いい体つきで……って、違う違う!!

「俺の、主様って……先輩だったんですか?」

「あら? 分かったたのね。でも、その話は後よ」

そう言つて、先輩は堕天使に面と向かつていった。

「御機嫌よう、堕ちた天使さん。随分と私の可愛い眷属を甚振つてくれたようね」

「げげ!! ソイツつてグレモリー眷属だったの!? そんな弱つちい奴が眷属だなんて、  
グレモリーも変わってますねえ?」

「それは私の自由よ。それよりも、この町は私が管理している町なの。次このような行  
為をしたら次は容赦しないわよ」

リアス先輩の目が鋭くなる。素人の俺からでも分かるぐらいに怒っていらつしやる。

「ハイハイ、分かりやしたよ。そんじゃまあ、次からは首輪でも着けて飼いならし  
なあ。散歩がてらにぶち殺しちゃうから」

物騒な事を言った墮天使は黒い翼を広げ、飛んでいった。

「あ、そうそう。俺たちの名前はアキュラム。次ぎ会ったら、そんな時はぶつ殺させてもらいますよ。ギャハハハハハハッ!!」

そう言つて墮天使は去つていった。今この場にいるのは俺と、執行人とリアス先輩だけとなった。

「ふう、何とか間に合つたわね。大丈夫イツセー?」

「え? 先輩……俺の名前……」

「もちろん知つてるわよ。貴方はいい意味と悪い意味で有名なもの」

そんな……俺のような奴を……感激です!!

「本当は色々と話したいことがあるけど、明日にしましょう。テツカもそれで良いわね?」

「ん? ああ、それで構わないが……何処で話すんだ?」

「明日の放課後、学園に来てちようだい。イツセーもその時に状況を説明するわ」

「あ、ハ、ハイ。分かりました」

「んじや、俺は帰るぞ。飯屋探してる途中だったしな」

先輩との約束したテツカさんはどこか行つてしまい、俺も急いで家に帰ることにした。

おまけ アキュラムの企み

「ハア、今日は厄日だな。やる気のない仕事をサボってたらドーナシックからはどやされるし、暇つぶしで狩ろうとした悪魔がグレモリー眷属だし……」

そして……何より……

「どうしてこの街に魔法律家が来たんだよ。しかも執行人クラスがよ……」

しっかし、拙いですなあ。

「このままじゃあ、俺の計画に支障きたすんだよねえ」

まあ、どのみち計画は変更無しだし、このまま行くとしますか。それにしても……

「マツド的な喋り方ってあんなので良いのかねえ？ ま、いいか。俺が決めた事じゃないしね。ま、精々、頑張ってくれよ、ドーナシックとグレモリー眷属、そして魔法律家さん」

俺の崇高な計画の為に……キャハハハ！

### 第3条 悪魔の説明します

イツセー Side

今俺は、猛烈に感激と興奮と混乱に陥っていた。だつて俺のベットの隣には……

「……すーすー」

昨日会ったばかりのリアス・グレモリー先輩が横で眠っていた。

しかも何故か全裸で……

すると其処へ来ては行けない存在がやって来た。

「イツセー！ 毎日毎日夜遊びして、その上遅刻するなんて、今日という今日はもう許しません！ 少し話しましょう！」

「ちよつ！ 母さんタンマタンマ！ 俺起きてるから!？」

「いーえ！ 問答無用です!!」

やべえ！ 母さんキレてるよ！ だけでもつとやばいことが起こった。

「うーん……。朝?」

ヤツベツ!? 先輩も起きちゃった!?

ガチャ!

先輩が起きたのと同時に俺の部屋のドアが開き、母さんが入ってきた。

「イツセー! 起きて其処に座りな……」↑母さん

「……………」オ、オハヨ…………」↑俺

「おはようございます」↑先輩

瞬間、母さんの表情が凍り、目線を俺に向ける。思わず俺は目線をそらしてしまった。  
「ハヤク、シタク、シナサイネ…………」

機械的な声を出して、母さんは静かに扉を閉めると同時にドタドタと下へ下りていった。

「お、お、お、お、おおおお! お父さんっ! イツセーがああああ! イツセーがああああ!」

「ど、どうしたの!? そんなに慌てて!? イツセーに何があつたの!?」

「国際的いいいい! イツセーがああああ! 外国のおおおお!」

「ちよっ!? 母さん落ち着いて!? 母さああああん!?」

はあく、こりや、家族会議決定だな……。でも、取り敢えず、

「ありがとうございます」

「? ええ、どういたしまして…………?」

色々とツツコミ入れたいが、まあ、良しとするか。

先輩の処女が無事なのは安心して良いのだろうか？

その後、先輩と一緒に朝食を取り、母さん達には何て説明しようと思っていたが、先輩の魔力で何とかしてくれたみたいだ。

その後の先輩と一緒に登校する途中、周りから殺意と嫉妬と憎悪が突き刺さっていくのがとても辛い……。特に野郎共からの視線が……

そうこうしていくうちに教室に着いた途端、殺気を感じた。

「死ねや！ イッサーエエエ!!」

声と共に迫ってくる拳を払いのけ、殴ってきた坊主頭の逆に関節を決める。

「アダダダダ!!」

「お、おい、イッサー！ マジで決まってるぞ!」

「んお？ ああ、ワリイワリイ」

因みに関節を決めた坊主頭は松田って奴で止めに入ったが眼鏡が元浜だ。

因みに変態でもある。

「「お前もだろうが!!」

否定できん……っていうか、心の中を読むなよ。

「と、取り敢えずイッサー。俺達を分かれた後、何があつたんだ!」



「あく、いってー。そうだぞイツセー！俺達、モテない同盟の誓いはどうした!？」

怒鳴る松田と元浜の視線が鋭い。つーか、怖いぞ。

ふっふっふ、二人にこれ言ったらどうなんだろうな？

「おまえら、生乳を見たことあるか？」

悪友二人はその一言で戦慄し、地に伏せていった。

—放課後—

……何か時間が飛んだ気がするが良いか。さて、放課後になったぞ。確か先輩は使いを出すって言ってたけど……

そんな時、廊下から女子の悲鳴が聞こえてきた。それもイケメンを見たような声で。

「や、兵藤君」

「お前かよ、木場」

コイツは学校一のイケメン、『木場祐斗』きばゆうとである。剣道部所属で女子からモテまくりの

野郎だ。んでもって、悪魔でもある。

「お前が先輩の眷属だったんだな」

「へえ、気付いてたのかい？」

「んにや。悪魔だつて知つてたけど、何処の眷属かまでは判んねえよ」  
「そうなんだ。それじゃ、ついて来て」

木場の案内で先輩の所に行くが、後ろで女子が腐の発言をしていた。マジで止めてくれ……

そんなこんなで、着いたのが旧校舎の一室。其処には、

—オカルト研究部—

と、ネームプレートがかかっていた。

「悪魔なのにオカルト研究部？」

「それについては部長に聞いて」

まあ、何か理由があるんだろうな。きつとそうだ。

「祐斗です。兵藤君を連れてきました」

木場がドアを空けて中に入ると其処には、

「ほお、結構いけるな、この羊羹」

「分かりますか？」

「ああ、上質な餡を丹精こめて練り上げ、さらに上質な粉寒天を加えて形を整える。実にいい仕事してるな」

「因みにお取り寄せで一本、500円です」

「何と!? こんなに上質な材料使ってるのにお値段が安いとは!?!」

昨日あった魔法律家のテツカさんと学校一のマスコット『塔城小猫』とうじょうこねこちゃんとは何か、お菓子評論会をしていた。その横でリアス先輩と二大お姉さまの一人、『姫島朱乃』ひめしまあけのさんが苦笑いしていた。

「どういう状況ですか?」

その後、お菓子談義している二人をよそに、リアス先輩から悪魔と天使と墮天使、三竦みの状況と悪魔の事情などを教えて貰った。通信教育だと三竦みの戦いしか載ってなかったからな。あと、俺が殺された理由や俺の中に宿っている神器について話し合った。ドライブの事話したら驚いてたけど。色々と教わっているうちに、ついに、神器開放の時間がやってきた。

「じゃあ、イツセー。貴方の中にある神器を目覚めさせるから、手をかざしてちょうだい」

リアス先輩の言うとおりに左腕を上にした。

「俺も色々と試したんですけど、どうやるんですか?」

「一番簡単なのはあなたの思い描く最強の姿を思い浮かべるの」

リアス先輩に言われ色々と思像する。俺が思い浮かぶのは、あの姿しかないな……。

「そしてその姿を真似るのよ。強くよ、軽くじゃあ駄目」

「え？ 真似るんすか？」

アレをどう真似るんだ？ ええい！ だったらやってやるぜ！

俺は左腕を床に思いつ切り叩き付けた。

「ルルガ ラグドグラ シャグドラムラ（叩き潰せ、獄龍の牙より作られし鎚よ）」

一言一句間違えず、ある地獄の使者が使う言葉を言う。

「ララドラグ・グリハグロ!!（我が魂、アルドウラの魔鎚!!）」

その瞬間、左腕が光り輝き次第に形作っていき、光が収まると俺の左腕は赤色の籠手が装着されていた。

「これが、赤龍帝の籠手……」

やっと神器が出せるようになった。あとは、ドライグを目覚めさせるだけだ！

「おい、ドライグ！ とつとと起きろ！ いつまで寝てんだよ。十年も寝てんじやねえ

よ！ おーい、起きろー。いや、起きてくださいーい、ドライグさーん」

……………シカトかよ。

「あー、イツセー。まだ、覚醒したばかりだから、すぐには目覚めないわよ」

「え？ そうなんすか？」

「ええ。とくに神滅具クラスはもう少し時間が掛かるわ」

ええー。何かガツカリなんです……

「それに関しては時間を掛けましょう。さてと……」

リアスせんば……じゃなかった。部長はお菓子評論会をしていたテツカさん達の方を、向いた。

「さて、次は貴方の番よ。テツカ」

どんな話が飛び出してくるのだろうか。

おまけ お菓子同盟結成

リアス達に会うため、俺は駒王学園『オカルト研究部』の前にやって来た。一応、お土産として商店街で買った老舗和菓子屋のどら焼きを持っていつて。夜中12時に並んで。

中に入ろうとしたら部室のドアが開いた。

「お待ちしておりましたわ、薪菱鉄火さん。どうぞ中へ」

黒髪の巨乳ポニーテールの女性が案内してくれた。

ん？ なんだ、この感じ……？

「部長、鉄火さんがお見えになりました」

「ありがとう、朱乃。彼にお茶を出してあげて」

「はい、部長。では、ソファーに座ってお待ち下さい」

「あ、お気遣いどうも」

んじゃ、座って待ちますか。前のソファーには小さき……

ドカン！

……可愛らしいお嬢さんが黙々と羊羹を食べていた。あ、そうだ。

「良かったら食べるかい？」

「いただきます」

あげたどら焼きを見た途端、お嬢さんの目が見開いた。

「これは、商店街にある老舗和菓子屋『柳葉』の100個限定のどら焼き!? 使用している材料は高級なのに一個150円で販売し開店して僅か10分で品切れになるという超人気のどら焼き!」

「ほお、お嬢ちゃん分かるかい。昨日の夜中12時に並んで買ったんだよ」

「強者ですね、良かったらどうぞ」

お嬢ちゃんから羊羹を貰い、一口食べた。

「ほお、結構いけるな、この羊羹」

「分かりますか？」

「ああ、上質な餡を丹精こめて練り上げ、さらに上質な粉寒天を加えて形を整える。実に

いい仕事してるな」

「因みにお取り寄せで一本、5000円です」

「何と!? こんなに上質な材料使ってるのにお値段が安いとは!?」

「このお嬢ちゃん、やるなあ。」

「食……主にお菓子については一切の妥協はしません」

「それでこそお菓子好きだ! 一緒に語ろう!」

「ええ、思う存分語りましょう!」

こうして、俺とお嬢ちゃんとの間にお菓子同盟が結成された。

## 第4条 魔法律家、説明します

テツカ Side

いやー、ここまで話が弾んだのは久しぶりだなあ。しかも、話してる間に色々あった  
ぼいな……。

「それじゃあ、テツカ。説明してちょうだい」

「あいよ。つと、その前に自己紹介だな」

俺のこと知ってるのリアスとそこの新米君ぐらいだし……

「俺は魔法律家執行人、薪菱鉄火だ。よろしくな」

「魔法律家？」

「何ですかそれ」

まあ、知らないのも無理ないか。

「そんじやま、魔法律家について説明しよう。魔法律家とは、人に害を為す悪霊・怨霊に  
裁きを下す……簡単に言えば除霊のようなものだ」

「除霊？ テレビに出てくる霊媒師や協会の悪魔祓いみたいなものですか？」



「あんな妄信してる連中とは全然違うし、テレビに出てる連中は偽物だし……」

「そうだよ、小猫ちゃん！ インチキ霊媒師と悪魔祓いと魔法律家は全然ちがうよ！」  
新米悪魔が何か全力で否定してるぞ。あ、そう言えばコイツも魔法律家だったな。

「あ、すみません」

「ふう、話を戻すぞ。とは言っても実際に霊を裁けるのは執行人、つまり俺にあたる」  
「じゃあ、兵藤君はどうなんですか？ 先ほどの発言から兵藤君も魔法律家のような事を言いましたか……」

「『ような』じゃなくてそうなんだろう？」

「ウス！ 実は俺も魔法律家で「第二級書記官だろ」……え？ 分かんすか？」

驚くのも無理ないか。普通は分かんないしな。

「昨日の今日で二度も堕天使に襲われたら気になるだろう？」

俺は鞆からファイルを取り出し、一枚の書類を取り出す。

「えー、名は兵藤一誠。駒王学園2年A組所属。幼少の頃、友人と共に悪霊に襲われていたところを駆けつけた魔法律家に助けられ、以後、魔法律家を目指すも親が反対し、入学は断念。代わりに魔法律通信教育にて魔法律を受講し、通信課程修了後には第二級書記官として現在に至る……と」

「ちなみに第二級書記官って階級で言うのと」

「一番下っ端」

「グハツ！」

あ、血吐いて倒れた。

「ちよ、ちよつとテツカ!? ストレートにそんなこと言わないでちょうだい!」

「だって本当の事だろ? 魔力も戦闘能力もゴミ以下の成り立て悪魔なんざ、そんなもんだろ?」

「グハツ!」グサグサグサツ

「兵藤先輩、かなりの大ダメージを受けてます」

「お願いだから、もうやめてテツカ! これ以上はイツセーの精神が保たないわ!」

そうだな……。この辺で止めてやるか。

「まあ、なんだ。悪魔として今言った事は事実ではあるが、札やペンの使い方、術の行使、更にはさっきの地獄の言葉。魔法律家としては第一級……。いや、裁判官補佐クラスだな」

「あらあら、では兵藤君はそれなりに優秀なのですね」

「ああ、魔法律家としてはそれなりに優秀かもしれないが、悪魔としてはゴミ以下だな」

「ゴミ以下ゴミ以下言わないでくださいよ!?! 立ち直れなくなりますよ!?!」

「んじやまあ、次に行きますか」

「無理矢理話を戻した!？」

だって、話が進まないんだもん。

「んじや、本題だ。俺がここに来た理由、それはそこにいるリアス・グレモリーともう一人の上級悪魔の要請でやって来た」

「部長の要請ですか？」

「ああ、もう一人については置いといて。理由はこの街の現状だ」

ああ、リアスと新米君は何となく理解してるみたいだな。他の人は分かんない顔してるね。

「ええ。ここ数年で悪霊による霊犯罪が増加しているの。しかも私達では対処できないほどの数よ」

「そう言えば霊の数の昔より増えてるような気が……」

「実際に増えてる」

そう言つて、俺はある調査書を取り出しリアス達に見せた。

「なんすか、これ？」

「ここ数年の駒王町の霊磁気の観測データだ。ここ数年の駒王町の霊磁気の高さは異常を示している」

「テツカ、簡潔に言つてちょうだい。一体この街で何が起こつてるの?」

リアスの言葉に全員が俺に注目する。これは覚悟して言った方が良いみたいだな。

「分かった。単刀直入に言おう。今この街は魔法法律協会からとある指定を受けた」

「とある指定……ですか？」

「ああ。その指定とは……『重霊地』だ」

「なんですって!?! テツカ、それは本当なの!?!」

俺の言葉にリアスが驚愕する。他のメンバーは分かかっていないみたいだ。

「あ、あのく、部長。重霊地ってなんですか？」

「イツセーは知らないの？」

「はい、全く……」

「知らないのも無理はない。重霊地については一部の執行人や上級悪魔、あとは魔王しかその存在を知らない」

「そもそもその重霊地って何ですか？」

お嬢ちゃんが質問してきた。

「重霊地ってのは、簡単に言えば霊的な物が集まりやすくなる土地のことだ」

「集まりやすくて、それじゃあ、悪霊も増えるってことですか!?!」

「悪霊ならまだ良いほうかも知れない。問題なのは他にもある」

「他にも……?」

「過去に重霊地となった地域では歴史的な事件や出来事が発生しているってことだ」  
「これだけ言ってもまだ気付かないのか？」

「大きな例として挙げるなら、フランスの百年戦争や天下分け目の関ヶ原の大戦とかだ。小さな事例で一番有名なのはロンドンの切り裂きジャック事件だな。あれも重霊地の影響などによって起きたものだ」

「へへ、知らなかったなあ。でも、それを分かってきたんだ？」

「ああ、二人の要請もあるのだが、もっともな理由は島流しだな」

「……へ？」

あー、驚いてる、驚いてる。めっさ、驚いてるな。

「島流しの件は置いといて、まあ、宜しく頼むよ。グレモリー眷属の皆さん」

「そうね、みんなも自己紹介しなさい」

「あ、はい。グレモリー眷属の騎士<sup>ナイト</sup>、木場祐斗です」

「……同じく、戦車<sup>ルック</sup>の塔城小猫です」

「うふふ、リアスの女王<sup>クイーン</sup>の姫島朱乃といいます」

「えーと、新人悪魔で魔法律家第二級書記官の兵藤一誠です。宜しくお願いします」

えーと、祐斗に小猫に朱乃さんにイツセーか……。

「よし、覚えた。これからよろしくな」

これからこのグレモリー眷属達と頑張っていきますか。

おまけ 島流しの理由

「ところでテツカ。ちよつといいかしら？」

「ん？ どつたの？」

「飛ばされた理由はどういうものなの？」

「ちよ、部長!? すっごいストレートっすよ!？」

部長がどストレートに聞いてきたぞ！

「まあ、教会の老害共の嫉妬とかだな」

「それだけ？」

なんか、部長がいい笑顔になっているぞ。

「まあ、ほかにも理由はあるけど、いつか話す」

「絶対よ。あなたはすぐそうやってはぐらかすんだから」

「はいはい」

羨ましいなあ。部長とあんなに親しげに話せて……。よし、俺も、

上級悪魔になってハーレム王になってやるぜ！」

「そういうのは誰もいないところと心の中で宣言しろよ。見てて痛いし、声が漏れてるぞ」

「……不潔です」

「あははは……」

「あらあら、素直な子ですね」

「もう、イツセーたら……」

………なんかすみません。

## 第5条 イッセー、シスターを助けます

テツカ Side

リアス達、オカルト研究部と出会って早数日。色んな事があった。

リアスの御陰で旧校舎の一室を事務所として借りることができた。勿論、リアス達の特権や魔力などで使用できるようにしてもらった。

開業してまだ日も浅いのか、一向に依頼が来なかつたが、暇な時間の分、イッセーの魔法律家としての能力を分析することにした。

因みにイッセーの話によると、何でも通信課程修了後に出会った引退した魔法律家に色々とお話を聞いたらしい。成程、だからあそこまでの技量がある訳だ。

悪魔としてはイッセーは新人悪魔の通過儀礼であるチラシ配りを行っていた。しかしイッセー、夜中にハーレム王になりたいなんて叫ぶもんじゃありませんよ。端から不審者に見えるぞ。

それでもってチラシ配りを卒業したイッセーもいよいよ契約取りに挑戦するのだが、ここからは大爆笑物だった。



まず、依頼者の所に飛ぶための魔力が全くない。俺が最初に言った通り、魔力がゴミ以下だったので依頼者の自宅まで向かうという前代未聞な出来事が起きた。

因みにイッセーは「チャリでお宅訪問する悪魔なんているんですか!?!」なんていうが、今まさにお前のことだよ、イッセー。

んで、契約の実態を見ようと、遠見の鏡で見てたら、何故か知らんが依頼者とアニメ談義してた。ドラグ・ソボールや美少女アニメやらについて朝まで語り合ってた。

結果は言うまでもなく破談であつたが、アンケート面については最高の評価だったらしい。

二回目の契約取りには俺も一緒にいつて行つたが、ありや、地獄だつた……。

契約者の名はミルたん。世紀末覇者のような巨漢がパツツンパツツンの魔法少女の服を着て、語尾に「によ」なんてつけて何かの罰ゲームかと思つたら素であるから余計質が悪い人物だつた。願いが「魔法少女になりたい」なんて、土台無理な話だろう。

しかも、無理つて分かつたら、魔法少女アニメの鑑賞会始めたからこつそり抜け出して部屋に戻つてきた。因みに今回のアンケートも最高評価だつたらしい。

と、まあざつとイッセー達の状況はこんなものだ。

んで、現在、イッセーは……

「イッセー! 何でシスターなんか連れてきたの?! 一歩間違えたら戦争物なのよ!」

「す、すみません……」

「はわわわわ……」

何故かシスターを連れてきて絶賛お説教中だった。

話をまとめると、契約取りに失敗続きだったイツセーが公園で黄昏れてるときに困っていたシスターを見つけて声を掛けたいらしい。

協会までの道のりを聞いてきたシスターだが、イツセー曰く、この街の協会はすでに廃墟になっており、不審に思ったイツセーが此処に連れてきたが、リアスに見つかりこっぴどく説教されることになった。三時間正座で……。

んで、現在、

「いいことイツセー。協会側であるあの子を此処に連れてくることはどういう事かわかっているの？ 戦争の引き金になりかねないのよ」

「はい……」

「本来、私達悪魔と協会側、堕天使陣営との干渉は基本禁じられているの。しかも些細なことで大問題に発展する場合もあるのよ」

「重々承知でございます……」

「だったら……」

「ハイハイ、そこまでだ。リアス」

長くなりそうなので、止めに入る。

「ちよつとテツカ。何勝手に……」

「この子の話を聞く限り、イッセーの行動はある意味正しいんだよ」

「? どういう事なの?」

「まず、この子、アーシアって名前なんだが、この子が保有する神器が原因で教会を追放されたんだよ」

「追放? 神器を保有してただけで?」

「問題なのはその神器の能力だ。彼女の神器『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』の能力はとんでもない物だ」

色々と「見た」が、こりやとんでもないな……

「何がとんでもないんですか?」

「ああ、『聖母の微笑』は癒しの力で本来は聖なる光なのだが、どういう訳か墮天使と悪魔にも癒しの光を与えるもので、協会で倒れてた悪魔を治療して協会を追放されたみたいだ」

「え!! そんなの有り得ないわ!! 聖なる光は私達悪魔にとっては猛毒なのよ!」

「だが、実際にはそうなってる……。しかし、それだけではない。そうだからイッセー」

この街の事情はイッセーの方が詳しいからな。ここはイッセーに任せよう。

「はい。まず、この街にある協会は数年前に使われなくなっているんです」

「そうなの？ 朱乃」

「ええ、記録によりますと、確かに廃墟になっています」

「しかも、あの協会には濃度の高い霊燐が漂っていて悪霊が生息してる可能性が高いんです。だからアーシアを此処に連れてきたんです」

「……私に怒られるのを覚悟して？」

「ハイ」

イツセーの嘘偽りのない言葉に頭を抱えるリアス。出会ってまだ数日しか経っていないが、それでも分かることは分かる。イツセーは困っている人を助けたいという思いが人一倍に強いと言うことだ。

勿論、リアスも他の皆も分かっている。しかし、リアスも立場というものがある。

「ハア、そういう事情なら仕方ないけど、このオカルト研究部には彼女は置けないわ」

「はい、この部室にはアーシアを置くことは出来ませんが……」

「うちの事務所に置くんだろ？」

イツセーもイツセーで色々と考えているようだな。

「確かに魔法法律協会の決まりとして、『魔法法律及び裏の事情を知る関係者でやむを得ない事情であった場合に限り、事務所に招き入れ、保護することが出来る』つまり、俺の立ち上げた事務所は一種の治外法権みたいなものになるんだよ。イツセーの奴、さっそく

この決まりを利用するつもりだったな」

そう、魔法律協会が定めた規則を利用してアーシアを護ろうとしたんだ。優しいんだな イッセー。変態だけど……。

「ハア、分かったわ。アーシアの件はテツカに任せるわ。イッセーもそれで良いわね？」

「はい、保護できるだけでも良いんです」

その言葉を聞いてか、リアスの顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。

「そう、それじゃあ改めて自己紹介ね。初めまして、アーシア。私はこの街を管理している上級悪魔でオカルト研究部の部長、リアス・グレモリーよ」

「リアスの女王で副部長の姫島朱乃です」

「同じく部員の木場祐斗です」

「……塔城子猫です。この部で唯一の一年生です」

「悪魔じゃないが、俺は魔法律家執行人の薪菱鉄火だ。我が事務所は君を歓迎しよう」

「改めて、俺は兵藤一誠。こここの新人悪魔で魔法律家……第二級書記官だ。よろしくな」

リアスの自己紹介を皮切りに次々と自己紹介をし、残すはアーシアのみとなった。

「えつと……あ、アーシア・アルジエントです。暫くの間ですが、よろしくお願いします」

こうして彼女、アーシア・アルジエントを我が『薪菱魔法律相談事務所』に招き入れ

ることとなった。

「んじや、今日はこれでかいさ……」

「ああ、アーシアさんの事で伝え忘れてましたわ。リアス、大公から討伐の依頼が来てます」

……今日はもう少し掛かりそうだな。

おまけ イッセーの師匠

これは、イッセーに関して少し聞いてみたときのことだった。

「そう言えばイッセーさあ」

「ん？ 何すか」

「お前、誰から術とか教わったんだ？ 確か通信教育じゃあ筆と札の簡単な使い方しか書いてなかったはずだろ？」

「ああ、その通信教育が終わった頃に引退した魔法律家の人に教わったんだ」

へー、そうだったんだ。なんか意外。

「その師匠ってどんな人？ 何か気になるんだよなあ。」

「うーん、なんていうか、豪快で破天荒な人かな？ 魔法律においても、性欲においても、

全てその人に教わったんだ」

「ほお、性欲において……は？」

え？ 急に何言い出すんだコイツ？

「いや、師匠は女の子は足とかうなじとか言うけど、俺はおっぱいこそがじんる「あ、もういいや。聞いた俺が馬鹿だったよ」って、まだ語り終わって……」

……本当にコイツ雇って大丈夫だったのかな……？

## 第6条 魔法律、執行します

F e r r   S i d e

アーシアの処遇について話し終わったオカルト研究部を待っていたのは大公からの「はぐれ悪魔討伐依頼」であった。

大公からの命を受けたリアス達は「はぐれ悪魔バイザー」が潜伏している廃工場へと出向いたのだった。

因みにテツカもこの討伐依頼に同行している。

「……ねえテツカ。何で貴方も来たの？ この件は私達に任されているはずよ」

「あー、念のためだ。はぐれが悪霊になったら対処できるのはイツセーだけじゃ無理だからな」

「はぐれ悪魔が悪霊になることってあるのかい？」

「希だけど、この霊燐の量じゃ確実になるかもしれないなあ」

イツセーの言葉にリアス達が周りを見るとモヤのようなものが多く漂っていた。

「確かに漂っているわね……」

「……生臭いです……」



「ほい、小猫ちゃん。匂い防止のマスク」

「ありがとうございます」

靈燐の匂いを嗅いだ所為か、小猫は鼻を押さえていたが、テツカが持参したマスクを子猫に渡す。

「小猫、もう少し我慢して。じゃあイツセー、これを機に悪魔としての戦い方を学びなさい。勿論、魔法律家としての戦い方をしないでよ」

「え、使っちゃダメなんすか？」

「いや、使っちゃダメだろ？ お前只でさえ悪魔としての戦闘能力はゴミ以下なんだし」  
「ホントにゴミ以下って言わないでくださいよ!? これでも木場とかに訓練とか頼んでんすから」

「ホントか？ 木場」

「うん、兵藤君に頼まれたんだ。土下座までして頼まれたから断るに断れなくって」

木場の言葉に鉄火は感心する。イツセーのような性欲の高い馬鹿は木場のようなイケメンを敵視している事があるからである。

「へえ、熱心だな。じゃあ、悪魔の駒の特性も分かるか？」

「はい。えっと、木場の『騎士』の特性はスピードで子猫ちゃんの『戦車』は馬鹿げた攻撃力と屈強な防御力、『僧侶』は魔力に特化していて、『女王』は『騎士』『戦車』『僧侶』

『兵士』の全ての力を兼ね備えた駒…ですよね？

「正解と言いたいけど、一つ忘れてるわよ。イツセー、貴方の駒である『兵士』の特性は？」

「えつと、『兵士』は……」

「勉強会は終了だ。ほくら、お出でなされた……」

鉄火の言葉に身構えるリアス達。その時、廃工場の奥から何かが現れた。

「不味そうな匂いがするぞ？　でも美味そうな匂いもするぞ？　甘いのかな？　苦いのかな？」

そう言つて現れたのは、上半身が女性で下半身が獣のような姿をした怪物。この怪物こそが討伐対象である「はぐれ悪魔バイザー」である。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しにきたわ」

臆することなく凜と言い放つリアス。しかし、その言葉をバイザーは嘲笑つた。

「お前達が？　私を？　愚かな悪魔達だ。その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染め上げてやるわああああ！」

バイザーが吠え、リアス達に向かってきた。

「雑魚ほど洒落た台詞を吐くものね。祐斗！」

バツ！

近くにいた木場がリアスの命を受けて飛び出す。

一誠は目で追ったが、木場の動きが徐々に速さを増していき、ついには目で追えなくなっていた。

「最初は騎士の木場なんですかね？」

「そうよ。でも、祐斗の武器はスピードだけじゃないのよ。祐斗の最大の武器は剣よ」

リアスの言葉通り木場の手には西洋剣が握られており、鞘から抜くと抜き身の剣が露わなる。

スッ！

再びその場から消えた木場。次の瞬間、バイザーの両腕が斬られ、悲鳴が木霊する。

「ぎゃああああああああああああつー！」

あまりの痛みに悶え苦しむバイザー。斬られた両腕からは血が噴き出す。

「これが祐斗の力よ。『騎士』の特性と達人級の剣さばきの二つが合わさることで、あの子は最速のナイトになるのよ」

「確かに速いが、アイツはまだまだのびるな……」

「へー、そうなん……って、小猫ちゃんが!？」

感心しているイツセーを余所にバイザーは次の標的を小猫に移し、前足で踏みつぶそうとしていた。

「死ねええええええ!!」 小娘ええええ!!」

バイザーは前足で小猫を踏みつぶした……かに思えた。

「無駄よ。小猫は私の自慢の『戦車』よ? あなたの踏みつけて小猫は潰せないわ」

『戦車』の特性は馬鹿げた怪力と屈強な防御力。バイザーの前足を徐々にあげていく子猫。

「さすが小猫ちゃん。戦車だけのことはある……。怒らせないようにしよ……」

「そういえば、森沢さん。小猫ちゃんにお姫様抱っこされたって言ってたなあ」

二人の決意を余所にバイザーの前足を持ちあげてどかす小猫。

「……ふっ飛べ」

小猫は空高くジャンプし、バイザーのどてつ腹に拳を鋭く打ち込むと、バイザーは後方へ大きく吹っ飛んでいった。

「……怪力って、レベルじゃねえぞ。あれ……」

「小猫ちゃんもそうだけど、それに惚れる森沢さんも凄いな……」

二人の呟きを余所にリアスの『女王』姫島朱乃が前に出る。

「では、最後は私ですわね」

「ええ、任せたわよ。朱乃」

朱乃は笑いながら子猫の一撃で倒れ込んだバイザーのもとへ歩み出す。

「えっと、朱乃さんは『女王』で部長の次に強いんですね?」

「そうよ。『兵士』『騎士』『僧侶』『戦車』、全ての力を兼ね備えた無敵の副部長なのよ」

リアスが説明している中、雷がバイザー目掛けて落ちていった。

「グギャギャギャツツ!!」

「あらあら。まだまだ元氣そうね? まだまだいけそうね?」

そう言うのと朱乃はバイザーに向けて雷を落とした。しかも、一発二発だけでなく何発も落としている。

「お、おいおい……。やりすぎなんじゃねえか?」

「あ、あのー、部長? もしかして朱乃さんって……」

「ええ、イツセーの想像通りよ。朱乃は敵に対してのみ究極のSになるのよ」

「究極のSって……、ありやあ、サデイスティック星人みてえじゃねえか!」

「うわあ、朱乃さん。俺、怖いっス」

「大丈夫よ。朱乃は身内には優しいんだから。今度甘えてお上げなさい。やさしく抱きしめてくれるわよ?」

リアスの言葉に鉄火は「ちと無理……」と呟き、イツセーは「甘える自信ねえ……」と呟くのだった。

その間、朱乃の攻撃は数分間にも及び、バイザーの身体は某狩猟ゲームよろしく「こ

んがり上手に焼けましたー！」状態になっていた。

ただいま、朱乃さんの攻撃中。しばらくお待ち下さい。

朱乃が一息つく頃、リアスがその確認し領き、完全に戦意を失ったバイザーのもとに、リアスが近づいた。

「最後に何か言い残すことは無いかしら？」

リアスの言葉に問いかけるが、肝心のバイザーはというと、

「……………」

無言のままであった。

「……………言い残す力も残ってないのね。いいわ、安らかに眠りなさい」

そう言い、リアスの手には魔力が集まり放出しようとしていた……………その時だった。

「グ……………グギャアアアアアアアアアア!!!」

バイザーは奇声を上げ、木場に斬られたはずのバイザーの腕から白い触手のようなものが生え、リアスに襲いかかろうとしていた。

(しまっ!?)

突然の攻撃に驚いたリアスは完全に避けるタイミングを失ったが、リアス達には心強

い「眷属」と「幼馴染」がいる。

「一誠!!」

「了解! 『靈化防壁の術』!!」

鉄火の一声でイツセーは悪霊の攻撃を防ぐ『靈化防壁の術』でリアスを護ったのである。

「あ、ありがとうイツセー」

「いえいえ。主である部長を護るのは当然じゃないですか」

「やつぱり来て正解だったな。次来るぞ」

鉄火の言葉に全員が構えるが、悪霊化したバイザーは一向に向かつてこず、うずくまって唸りだす。

「ううううう……」

様子がおかしいバイザーに対してリアス達は勿論、鉄火とイツセーもバイザーの次の行動に警戒するが、バイザーの身体が変化し始めた。腕から生えた触手からは歪な口が現れ、身体中から無数の口が浮かび上がってきた。

「喰……わ……せろ……喰わ……せ……ろ……」

譫言のように呟き続けるバイザー。その姿は最早人を喰らう悪霊と化し、その証拠にバイザーの眼は悪魔だった頃の眼ではなく、完全に悪霊に堕ちた眼の色だった。

「完全に悪霊化したな。お前等も見とけ、これが悪霊化した悪魔のなれの果てだ」

鉄火の言葉がリアス達の胸に刺さる。もし、はぐれにでもなったら、自分達もこのようになるのだと戦慄した。

「それじゃあ、お見せしますか。俺の魔法律を」

そう言い鉄火は、魔法律書を取り出した。その時バイザーも本能なのかは定かではないが、鉄火の行動に危険を感じたのか、攻撃をしようとするが、それを許さない人物がいた。

「ワリイが薪菱執行人の邪魔はさせねえよ！ 第二級書記官・兵藤一誠の名において『魔縛りの術』を施行する！」

イツセーの放った『魔縛りの術』を施した札がバイザー目掛けて張り付き、バイザーの動きを封じ込める。

「よくやったイツセー。ここからは俺の仕事だ。魔法律第946条『大量食人』及び『無断変形』の罪により『餓鬼道晚餐会』がきどうばんさんかいの刑に処す！」

魔法律の刑罰が決まると、辺りが静まりかえり、何処からか鈴の音が聞こえてくる。

——オオオオオオオ……

——食事ニアリツケルゾオオオ……

——急ゲ急ゲ、早くシナイトナクナルゾ……



何処からともなくぐもった声が聞こえると、地面から痩せこけた小人の大軍が現れ、そのままバイザーへと嘯み付いていく。

「グ?! グアツ!？」

バイザーが必死に取り払おうとするが、小人の数が多く為、別の小人に嘯み付かれる。「無駄だ。魔法律で召喚された餓鬼共は自身の食欲を満たすまでお前を喰らい尽くす」

鉄火の言葉通り、餓鬼とは六道の一つ『餓鬼道』に住まう鬼である。餓鬼は特定の物しか口に出来ず、常に飢えに苦しんでいるが、鉄火の唱えた魔法律『餓鬼道晚餐会』で召喚された餓鬼達は制約から解放され、悪霊を貪り喰らい尽くすまで止まらない。

「グギヤアアアアア!! た、助け……」

痛みによって意識が覚醒したバイザーは助けを求めるが、

「お前はそうやって助けを求めた人間を一人残らず喰らってきたんだ。だから俺はお前を助けない。精々、喰われる痛みを味わって地獄に堕ちろ」

鉄火の非情の一言によって斬り捨てられた。

「罪には罰だ。俺はお前達のような身勝手な悪霊共を決して赦しはしない」

それは、バイザーに向けてなのか、または全ての悪霊に対して言っているのかは分からないが、バイザーがこれで終わりなのは間違いないだろう。

その証拠に、巨体であったバイザーの身体は徐々に小さくなっていき、最後には綺麗

さっぱりと無くなり、餓鬼達も自分の住む世界へと帰っていった。

人間を喰らい続けたはぐれ悪魔バイサー。その最後は因果応報とも呼べる最後であった。

「よし、執行完了。これで終わりだろ?」

「ええ、これではぐれ悪魔バイサーの討伐は終了よ。みんなご苦労様」

リアスの言葉にオカルト部の面々は少々リラックスしていった。

「それにしても鉄火さんの魔法律は凄いですわね」

朱乃は鉄火の魔法律を賞賛し、

「ちよつと不気味に感じました。ついでに食欲も失せました」

鉄火の魔法律にむくれる小猫、

「それにはぐれ悪魔のなれの果てがどんな物か分かったし、良い勉強になったよ」

木場ははぐれの末路について学べたと言う。一方で肝心の主人公（一応）であるイツ

セーはと言うと、

「ウエエエ……」

何故かリバー<sup>吐</sup>ス<sup>い</sup>ていた。聞くところによると、餓鬼達から漂う地獄の悪臭をモロに嗅いでしまったためである。

最後はかなり締まりがないが、はぐれ悪魔討伐は幕を下ろした。

おまけ アーシアと地獄の使い魔

「ハア、イツセーさん達は無事なのでしょうか？」

私、アーシア・アルジェントは悪魔でもあり魔法律家でもあるイツセーさんとその上司のテツカさんに匿われています。その理由は私の神器が悪用されるかも知れないという事です。

もちろん、その事でも嬉しかったのですが、もつと嬉しかったのが、イツセーさん達とお友達になれたことです。幼少の頃から一人でしたのでとても嬉しかったです。

たとえば、イツセーさんやテツカさんが悪魔であつても……

注) 本作の主人公テツカは悪魔ではありません。

……アレ？ 何か聞こえましたか、気のせいでしょうか？ それはともかく、

「皆さんは大丈夫なのでしょうか？」

『ダイジョーブ、ダイジョーブ。みんな無事に帰ってくるわよ』

「そうなんですか？」

『心配性ねえ？ テツカがいるから心配ないよ』

「そうですか。それは安心……」

……アレ？ 私、誰とおしゃべりしてるんでしょうか？

『アハハハツ、ゴメンゴメン。姿見せるの忘れてた』

そう言つて声の主は私の前に現れました。その姿は、

「妖精さん……ですか？」

『んー、妖精とはちよつと違うかな。私はククリ。魔法師執行人薪菱鉄火と契約している使い魔よ。よろしくねアーシア』

「あ、は、初めましてククリさん」

『アハハハツ、さん付けなんてしないでいいよ普通にククリつて呼んでよ』

「えつと、じゃあ、ククリ……ちゃんでもいいですか？」

『フッフ、さん付けじゃなくてちゃん付けか。いいよ、それで』

なんか可愛い妖精さんですね。それでククリちゃん、どうしてここに来たんですか？

『んー、何て言うか、アーシアが寂しがってるの見てたら話し相手になつてあげようつて』

「あ、ありがとうございます。いっぱい話ししましょうククリちゃん」

その後、イツセーさん達が帰ってくるまで、ククリちゃんといっぱい話ししちやい

ました。  
ありがとう、  
ククリちゃん